

子どものことばが 教えてくれたこと

第3回

読書とことば

岩 辺 泰 吏



「学校の中で一番狭い所、息苦しいような所はどこ？」と聞くと、子どもたちは「トイレ」「掃除道具入れのロッカー」と答える。「ああ、掃除道具入れで遊ぶ子が今もいるんだなあ」と、変に共感したりもする。なかには、「教室」と言う子があつて、担任はちよつと焦ることがある。

続いて、「学校の中で一番広い所はどこ？」と、子どもたちになぞねる。たいてい、「校庭」「体育館」と答える。そこで、私はこう言う。

「そこに行くと、ライオンがいて、ゾウがいて、赤ずきんちゃんもいて、ハリーポッターがいる。原始人がいて、宇宙人がいる。徳川家康がいて、リンカーンがいる……」

「……?」
ハツと気がついた子が、何人か手を挙げる。

「図書室だ!」

「そうだ、そこには何でもがある。しかし、君が行って、その本を手を取らないかぎり、そこはただ静かな、つまらない紙の倉庫だ」。

四年生ぐらいなら、なるほど……とうなずいてくれる。

「ぼくがそこに行ったらね、ネコがいっぱいいたんだよ。さあ、ここに切りぬいたネコたちほどのお家（本）から逃げ出したんだらうか? 探してください」

と言って、「家出ネコを探して!」のアニマシオ

ンを始める。

動物名画案内『うふふの美術館』（福音館）のネコ達は、楽譜を眺めて話し合っている。音符は逃げ込んだネズミたちだ。『トラーネコ科のなかまたち』（ブロンズ新社）には、「最大のネコ」であるトラが漫画的な絵で説明されている。図鑑も読まなくてはおもしろくならないものだ。『国語辞典』の「ねこ」はことばだけだ。同じようにことばだけだけど、詩集『ネコとひなたぼっこ』（まど・みちお詩集・理論社）の表現とは違う。

そういう中に、一つ（二匹）だけ、物語のネコを入れておく。『椋鳩十のネコ物語』（理論社）から「屋根裏の猫」。それは、他のネコたちと明らかな違いがある。

「ニワトリをくわえている!」

「おじさんがホウキでたたこうとしている」

などと、見つけたことが発表される。

「目がすごく大きい。」

「なんだかこわそう……」

などと付け加えられる。

「このネコだけは、物語の中のネコ、現実にはいないネコなんだ。屋根裏で子どもを育てている母ネコだ。だから、どうしても食べ物を運ばなければならぬ。その強さ、たくましさを表すために、目をギョロッと大きくしたり、大きな口にニワトリをくわえさせたりして描いているんだね。」

いわなべ たいじ 読書のアニメーション研究会代表。
明治学院大学教授。前葛飾区立飯塚小学校教諭。

アニメーションの思想と方法を応用して、国語および学習全体の改革へのチャレンジを続けている。

グループで行うこうしたゲームの後に、学校図書室にあるネコの本を並べてもらう。子どもたちは新しい関心をもって本に手をのばす。

ある小学校でこのアニメーションをやった後で、担任の方が、「先生のお話されたような詩を子どもが書いています」と児童の作品を見せてくれた。

だれでも使えるひみつのまほう

富士市立神戸小 四年 女子 T・M

私は一つだけ まほうが使える

それは どんな世界へでも行けるまほう

雲の上、おかしの国、にじの上だって行けるんだ

じゅんびするものは

本と時間とワクワクする心

あなたの家にもあるでしょう？

主人公になったつもりで

表紙をめくってみたならば

そこは あなたの想像

夢のような楽しい国！

ときにはこわい世界ももちろん味わえる

本を読んでる時間だけが

いろんな自分に出会える最高のひととき

今日はどんな世界に行こう

あなたも

夢のとびらを開いてみよう

それは、まさに「新しい自分を発見すること」に読書の喜びを見いだしつつ、友だちと分かち合おうとするものだった。つまり、そのことによつて、分かち合うことば、豊かな可能性をもつ「わたし」を見いだしていくことばとして獲得されていくことが、子どもたちを、若い世代を、より広い未知の世界に一歩踏み出させていくちからを育てていくのだと思う。

創造的な思考は、自由な読書によつてはげまされる。しかし、「自由な読書」には、「よき読み手」を励まし育てる「大人」や「友」（仲間）が必要である。「読書のアニメーション」は、その手立てを考えようとしてきた。

いま、子どもたちは学ぶほど、孤独になつていく。学校の読書の時間でさえ孤独だ。読書は本来、世界を広げ、友を得、「わたし」を発見し・確認し、豊かにしていくものである。「心の闇」と向かいあい、「真実のことば」を刻んでいく。そうして、「生きる力」を与えられる。「国民読書年」にあり、あらためてわたしたちは「読書」に何を求めて、子どもたちに読書を呼びかけるのか問い直したい。